

オガラ

作…中島御坊

・祖父(勉)

・母(恵)

・娘(祥子)

・勉

・雪

・幸

夏、母と娘が祖父の家に来る

娘「おじいちゃん来たよー」

母「ただいまお父さん」

祖父「おかえり二人とも。今日、暑かっただろ。部屋涼しくしてるから、早く上がりなさい」

娘「ありがとーおじいちゃん」

祖父「たける君は忙しいのか？」

母「一昨日から出張。お盆くらいお仕事休みにしてほしいんだけどね」

祖父「大変だな。帰ってくるのはお盆終わりくらいか」

母「そう。だから私たちもそれに合わせて帰るつもり。祥子、おばあちゃんにお線香あげるんだよー」

娘「分かってるよー」

祖父「祥子ももう高校生か」

母「最近友達と遊んで楽しそうにしてる。ちょっと前も友達と花火大会行ってたし。浴衣着てた。祥子―花火大会の写真、おじいちゃんに見せてあげて」

娘「はい。見てみておじいちゃんこれ、この前友達と花火大会に行った時の写真。人生初浴衣かわいいでしょ？友達とせっかくだから着ようってなって」

祖父「祥子はやっぱり綺麗だな。浴衣姿、昔のばあさんの姿によく似てる」

娘「おばあちゃんど？」

母「お母さんが浴衣着てるとこなんてみたことないけど」

祖父「今から何十年も昔のことだよ。二人とも20代の頃で。綺麗だったよ」

娘「写真とかないの？写真」

祖父「あの頃はカメラなんて持ってなかったからさすがに無いな。でも探せばあの時着てた浴衣があるかも」

娘「本当！」

祖父「でもだいたい昔だからどこにしまったかも忘れたな。また今度探してみるよ。そんなことよりスイカ庭で冷やしてるから食べるかい？」

娘「食べる！」

母「じゃあ私、部屋に荷物置いてくるね」

祖父「花火綺麗だったか」

娘「毎年行ってるけど、綺麗だったよー。浴衣も着てもっと楽しかった」

祖父「そうか。なら良かった」

娘「おばあちゃんってさ私の中では、病院にいる時しか知らないから、浴衣着てるってだけでもすごいびっくりした」

祖父「祥子は確かにそうか。お母さんから聞いたりしてないのか」

娘「聞いたことあるよ。すごい優しかったって」

祖父「めったに怒ることなんて無かったな。おじいちゃんも怒ってる姿を見たのなんてちょっとしかない。ほらスイカ切れたぞ。フォークかなんかいるか」

娘「欲しい―」

祖父「分かった。じゃあ取ってくる」

娘「ありがとう―」

母「大きいスイカだねこれ」

娘「ホントだよね。こんなの見たこと無い。ねえ、お母さん」

母「何？」

娘「あそこにさ火つけてるやつって何？」

母「あれは迎え火ってやつ。おじいちゃん昔から毎年お盆にやってるの」

娘「へえ、そーなんだ」

祖父「ほらフォーク。恵もいるか」

母「ありがとうお父さん」

娘「ねえおじいちゃん。あれ迎え火ってやつ？なんでやってるの？」

祖父「ああ、あれか。迎え火っていうのは、お盆にご先祖様が迷わないように家に帰ってこれるようになってるんだよ。お盆の終わりには送り火って言って帰ってきたご先祖様をあの世に送り出すためにするんだ」

娘「そんなのがあるんだ。あ、後その後ろにあるやつは？ちょっと大きい石だけおいてるやつ」

祖父「様子には言ったこと無かったか。あれは、幸の墓だよ」

娘「サチ？」

母「私のお姉ちゃん。血は繋がってないんだけどね」

娘「どういうこと？」

祖父「おじいちゃんとおばあちゃんが結婚してすぐって、まだ戦争が終わったばかりで親がいない子どもが多かったんだ。その時、見つけたのが幸でな」

過去回想

幸が横たわっている

勉「おい、大丈夫か！」

ゆすっても反応が無い

勉幸をおんぶする

勉「雪！雪！」

雪「どうしたんですか、突然」

勉「この子がそこで倒れてて、多分少し熱もある。布団と水を」

雪「分かりました！私は布団とこの子を拭きます。勉さんは水と布をお願いします」

勉「分かった」

それぞれ布団を敷いたり水を用意する

勉「ひとまず起きるのを待つか」

雪「驚きましたよ。急に女の子を抱えて帰ってくるんですから」

勉「俺だって驚いたさ。大人ならまだしも、見た目8、9歳の子どもが倒れてたんだ。さすがにほっとけないだろ」

雪「ちゃんと分かってますよ」

勉「明日この子を診療所に連れて行こう。熱だけじゃないかもしれない」

雪「はい。ごはんもう少しでできるので、後は任せて良いですか」

勉「ああ大丈夫だよ。ありがとう」

勉「戦争が終わって2年経ったが、まだいるんだなこんな子が」

頭をなで、布を交換する。

夕食後

雪「熱は少し下がりましたね。良かった」

勉「…」

雪「勉さん？」

勉「どうした？」

雪「いえ、私の顔をじっと見つめるので何か顔についてるのかなって」

勉「ああ、なんでもない。すまん」

幸「んん…」

幸が目を覚ます

勉「大丈夫か？無理に起きなくていい」

勉が幸を支えながら起こす

幸「お水…」

雪「すぐ持ってきますね！」

勉「体の調子はどうだ？ここが痛いみたいなのは」

雪「どうぞ、お水です。自分で飲めますか」

幸「うん…ちょっと頭が痛い、かも」

勉「まだ熱が下がり切ってないんだ。横になってゆっくりしてるんだ。明日、先生に診てもらおう」

幸「…ここは」

雪「私たちの家です。あなたが倒れてるところを勉さんが見つけたんです。食欲はありますか？」

幸（頷く）

雪「一応おかゆつくってあるので、温めて持ってきますね」

勉「どうして一人でいたんだ？」

幸「…」

勉「悪い。さっきから質問ばかりだったな。俺は勉。さっきの女の人は雪。俺の嫁さんだ」

幸「私は、幸」

勉「幸っていうんだな。よろしく」

幸「…」

勉「…」

幸「お父さんは分かんない。お母さんはずっと前に離れ離れになっちゃった。だからおばさんと一緒にいたけど、そのおばさんも皆と一緒に動かなくなっちゃった」

勉「…そうか。だから一人でいたんだな。よく頑張った」

雪「おかゆできましたよ。少し熱いですから気を付けてくださいね」

幸「…おいしい」

雪「良かったらゆっくり食べてくださいね」

幸、素早くおかゆを掻き込み食べる

雪「よっぽどお腹空いてたんですね。あなた、お名前は？」

勉「幸だっけさ」

雪「幸ちゃん。いいお名前。いっぱい食べてね幸ちゃん」

勉「思ったより元気そうで良かった」

幸、食べ終わる

幸「…ありがとう」

雪「お粗末様でした」

幸「…」

勉「食べ終わったらすぐ寝たな」

雪「良いじゃないですか、この子今まで大変だったんです。ずっと張ってた気が切れて疲れてるんですよ」

勉「そうだな」

勉、起こさないようにゆっくり横にする

雪「この子、ご両親か親族の人はどうしたんでしょう」

勉「さっき、そのことを話してくれたんだが、たぶんもういないんだろう」

雪「…そうですか。こんなに小さいのに」

勉「俺が見てるし、片付けしてて良いぞ」

雪「じゃあお願いしますね。私が片付け終わったらお風呂入っちゃってください。変わりますよ」

勉「分かった」

祖父「それが幸との出会いだった。最初は栄養失調気味だったんだが、大事にならずに済んだ。幸をその後どうするか悩んだんだが、そのまま二人で引き取ることにした。自分たちの子どもみたいにな。最初の方はやっぱりぎこちない感じだったけど、数カ月したら雪お姉ちゃんとか勉お兄ちゃんって呼んでくれるようになって。少しずつ心を開いてくれた」

娘「おじいちゃんとおばあちゃんにそんなことがあったんだ。初めて知った」

母「私だって中学生くらいの時に初めて聞いたよ。だってお父さんとお母さん自分たちから話さないんだもん」

祖父「どっちも自分たちの話なんてほとんどしたこと無かったからな」

娘「幸ちゃんとの話もつと聞かせてよ」

祖父「そうだな。さっきおばあちゃんが浴衣を着た話をしただろ？これは、ばあさんが浴衣を着た時の話じゃないが、ここで幸と3人で花火を見たことがある」

雪「スイカ切ってきましたよ」

勉「ありがとう」

幸「わーい。スイカだ！おっきいー」

勉「よくこんなの見つけたな」

雪「今日はせっかくの花火大会ですし、奮発しちゃいました」

幸「ありがとう！雪お姉ちゃん」

雪「喜んでもらえて良かった」

勉「幸は花火見たことあるか？」

幸「見たこと無いよ」

雪「じゃあ、初めてだしびっくりしちゃうかも」

幸「そうなの？」

勉「大きい音が鳴るからな。でもとても綺麗だからさ」

花火が始まる

幸「わっ！」

勉「お、始まったな」

雪「幸ちゃん大丈夫？」

幸「びっくりしちゃったけど、大丈夫！ほんとだ綺麗！」

勉「たーまやー！」

雪「かーぎやー！」

幸「…何？それ？」

雪「花火が上がった時にする掛け声だよ。たまやとかぎや。一緒に言ってみよ。せーのっ」

幸、雪「たーまやー！かーぎやー！」

雪「ほら、勉さんも」

幸、雪、勉「たーまやー！かーぎやー！」

幸「花火大きい！」

雪「楽しんでもらえたみたいで良かったですね」

勉「ああ。また今度、手持ち花火でも買ってきてあげようか」

雪「良いですねそれ」

勉「来年、幸と一緒に浴衣でも着てみたらどうだ？」

雪「私ですか？どうでしょう似合いますかね…」

勉「似合うよ。幸も着れたら嬉しいんじゃないかな」

雪「じゃあその時は勉さんも甚平着てくださいね。みんなで着ましょう」

勉「分かったよ」

雪「幸ちゃん、はしゃぎすぎて転ばないように気を付けてね」

幸「はーい！」

勉「もうすっかり母親姿だな」

雪「…」

勉「…すまん」

雪「…なんで謝るんですか？もう大丈夫ですよ」

勉「…」

雪「それに、こんな日に暗い顔してたら私たちも幸ちゃんも楽しめませんよ？」

勉「…」

雪が幸に近づく

幸「おりゃあ！」

幸が勉に飛び込む

勉「おお！びっくりした」

幸「一緒にこっちにきて見よ？」

雪「ほら勉さん」

勉「はいはい」

雪「あ！大きいのが来ますよ！」

幸「たーまやー！かーぎやー！」

勉「終わっちゃったな」

幸「また今度も一緒に見ようね！……お父さん！お母さん！」

雪「幸ちゃん…」

勉「幸…」

雪「うん！また3人で見ようね」

祖父「初めて幸がお父さん、お母さんって呼んでくれたんだ。あの時のことは今でもよく覚えてる。嬉しかったなあ…そこで初めて家族になれた気がした」

娘「おじいちゃん…」

祖父「実は、結婚してすぐに雪のお腹には赤ん坊がいたんだ。でも、後2カ月ほどで出産って時に流産したんだ。しばらく、雪も気分が優れなくて、母親と子どもと一緒に歩いてるところを見て、泣いたりしてた。でも、幸が来て、親だと言ってくれて。だから俺たちにとっては、幸は娘なんだ。血は繋がってなくても」

娘「お母さんはさ幸ちゃんどうだったの？」

母「…私ね、実は幸お姉ちゃんとはあったこと無いの」

娘「なんで…？だっておじいちゃんたちが若い時だったらお母さん生まれた時もいたんだよね？」

祖父「…」

母「幸お姉ちゃんね、私が生まれる前に死んじゃったの…」

娘「え…」

祖父「3人で花火をみた年の冬に、幸は長い間熱を出してな。そのまま息を引き取った…俺たちは子どもを二人失ったんだ」

雨が降りしきる

勉「……」

雪「……」

勉「……」

雪「今日も雨、ですね」

勉「ここ最近ずっとそうだな……」

雪「……」

勉「……」

雪「……やっぱり私は母親にはなれないですね」

勉「雪……」

雪「お腹にいた子も無事に産めない、幸ちゃんだって守れない。二人も子どもを先に逝かせてしまった……」

勉「……雪のせいじゃない。お腹の子も幸も誰かが悪いわけじゃない……」

雪「……」

勉「……」

雪「なんで、そんなこと言うんですか……」

勉「……雪？」

雪「なんであなたはそんな私を困らせることばかり言うんですか！私がちゃんとしてなかったから、二人とも死んだんです！私が全部悪いんですよ……私が何も母親らしくないから……」

勉「雪」

雪「勉さんは、私には責任が無いとか仕方ないとかそんなことばかり……一人目の子は確かに、私のお腹にいたんです。私のお腹の中で動いて、生きてるって教えてくれたんです……幸ちゃんも、お母さん、お母さんって呼

んでくれて、私のことを母親だと思ってくれた。そんな優しい子を助けられなかった…」

勉「……」

雪「私が悪くないなら、あの子たちは何で死んだんですか…誰も悪くなかったら、誰にこの気持ちをぶつけたらいいんですか…」

勉「…すまない。雪がそんな風に思ってたなんて考えても無かった」

雪「……」

勉「確かに、無責任だったかもしれない。雪に自分だけ悩んで苦しめると思わせてたんだな」

雪「…」

勉「雪ほどではないかもしれないが、俺もつらい…雪のお腹に手を当てて子どもが反応してくれてるのを感じて、本当に嬉しかった。こんな俺でも父親なんだって。流れた後は、俺だけでも立ち直ろうとしたんだ。忘れることはできなくても、雪はこれ以上思い込まないように努力してきた」

雪「それは、分かっています」

勉「でも、言葉が間違ってた。二人が死んだのは、俺たち2人のせいだ。親として子どもを守れなかった」

雪「…」

勉「だから、これからは二人で償っていこう。俺たちが元気に幸せに生活して、あの世で見てる子どもたちも笑っていられるように。きっとそれが今できることじゃないか？」

雪「そんなの…」

勉「すぐには無理でも、徐々にしていけないか？次の夏、前みたいに笑って花火見れるくらいにはさ」

雪「…」

勉「幸が好きなスイカと3人分の浴衣と甚平揃えて。幸と約束したろ？3人で一緒に見るって」

雪「しました。約束」

勉「幸としたいことまだたくさんあるだろ？」

雪「一緒に、桜も見たかったです。海にも連れていきたかった…同じ年頃の子どもと一緒に遊んで、もっと元気に過ごしてほしかった…」

勉「忘れないようにさ」

雪「はい…」

勉「…来月の今日、何の日か覚えてるか？」

雪「…幸ちゃんと初めて会った日」

勉「何かお祝いしよう。誕生日とは違うけどな」

雪「私たちにとっては、大事な日です」

勉「ああ」

祖父「それから3年、恵が生まれたんだ。雪は初めて、自分の命を削って子どもを産めた。同じ年頃の子どもと遊んだり、学校に行ったり、幸の代わりに俺たち二人にその喜びを教えてくれた。孫の顔まで見せてくれて、充分すぎるくらい親孝行してくれた。ありがとう」

母「もう…いいのに…」

祖父「毎年、お盆にはこうやって庭に作った幸の墓にスイカを置いてるんだ。とびきり大きいスイカを」

娘「そうだったんだ…」

祖父「今頃雪は、幸たちと楽しく過ごしてるんだろうな」

娘「おじいちゃんだって、今娘と孫と楽しく過ごしてるでしょ？」

祖父「…そうだな。孫がいるからおばあちゃんより楽しいかもな」

母「なんでそんなところで張り合ってるの」

祖父「まあいいじゃないか。年寄り一人で住んでると、こんな感じで誰かとしようもない勝負したくなるんだ」

母「はいはい、そうですか」

娘「ごちそうさまでした！おじいちゃんスイカありがとう。お皿片付けてくるね」

母「私もごちそうさま。お父さん今日は私が晩御飯作るしゆっくりしてて」

祖父「良いのか？じゃあお言葉に甘えて」

祖父「雪、俺たちの子どもはあんなに大きくなったぞ。孫の祥子も高校生だ。幸、妹の恵はもう15の娘がいる母親になったよ。スイカ、ちゃんとここに置いてるからな」

終